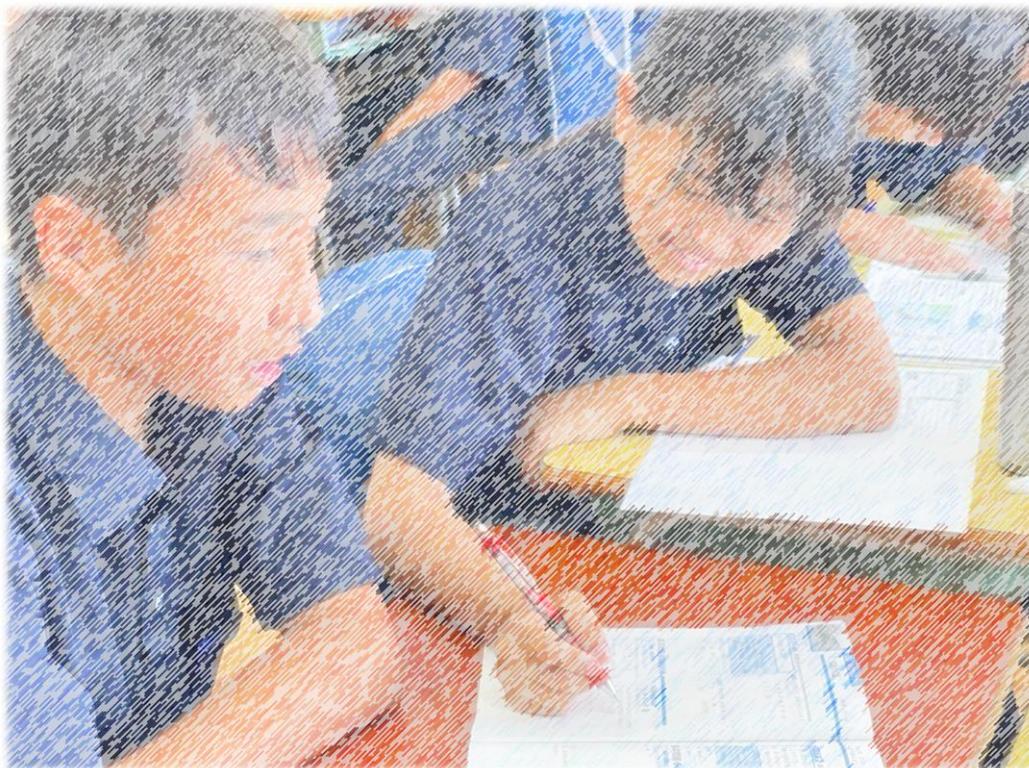


令和6年度 教育論文（全教科）

研究主題

# 生徒の主体的な学びへの転換

～サントの学習過程の実践を通して～



益城町立益城中学校

## はじめに

本校は昨年度まで、上益城郡教育委員会連絡協議会指定「学力向上」研究指定を受けて、校区の小学校の先生方と共に義務教育9か年を見通した学力向上を目指して様々な取組を進めて参りました。その取組の成果を確かめる場として、令和5年11月には研究発表会を行い、上益城郡内をはじめ県下多くの皆様に本町・本校の取組を見ていただき、多くの示唆に富んだご意見を賜ることができました。

研究の成果を感じる一方で、昨年度末の諸調査の結果から明らかになったのは、「概ね満足できる」学力を身に付けながらも、規範意識が低く、自他を大切な存在だと認識できていない本校生徒の姿でした。期待に反する結果に、職員一同大きな危機感を感じました。

また、職員のこれまでのキャリアや経験には格差が見られ、そのことが研究内容の理解度の差につながっていました。益城中の現状と目指したい生徒の姿を職員間で共有することはもちろん、指導者としての基本的な心構えから実践のノウハウといった基礎的なことまでお互いに学び合うところから取組を始めなければなりませんでした。このように、目の前の課題があまりにも多く、「できない理由」に目が行きがちな状況がありました。

しかし、キャリアや経験に差がある職員間だからこそ、知恵を出し合い互いに学び合うことは、職員が一丸となって研究を推進する原動力になり得ます。そしてそれによって生徒たちの心が豊かになれば、「概ね満足できる」学力が、さらに伸びる可能性を秘めていると考えることもできます。本年度は、生徒たちの変容ぶりで成果を示したいという思いから、取組をスタートさせました。

本年度の研究のキーワードは「みんなで」です。「みんなで学び、みんなで実践し、みんなで確かめ、みんなで次の一步につなげる」ことを大切にしました。上手くいかないことも多くありましたが、時に立ち止まり、目指す生徒の姿を確認し合いながら、みんなで研究を推進し、益城中学校にしかできない実践をしたいと願い、試行錯誤を重ねてきました。昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、諸学力調査から明らかになった生徒の実態を念頭に、「今年の益城中学校だからこそできる、魅力ある学力向上の在り方」を模索しながら、「みんなで」研究を進めて参りました。

ここに研究の一端をまとめ、今年度の取組を通して挙げられた成果と課題を分析しました。これを足掛かりにさらに今後の研究を深化させ、今後も目の前の子どもたちの「今」から始める創造的な学力の向上に、「みんなで」努めて参りたいと考えております。

## 目 次

はじめに

I	研究の概要	
1	研究主題	・ ・ ・ ・ ・ 1
2	研究主題について	・ ・ ・ ・ ・ 1
3	研究主題の設定理由	・ ・ ・ ・ ・ 1
4	研究の仮説	・ ・ ・ ・ ・ 2
5	研究の方法	・ ・ ・ ・ ・ 2
6	研究組織と主な活動内容	・ ・ ・ ・ ・ 3
II	研究の実際	
1	学習指導部会の取組	・ ・ ・ ・ ・ 4
	（1）授業づくり部の取組	・ ・ ・ ・ ・ 4
	（2）環境づくり部の取組	・ ・ ・ ・ 1 1
2	英語教育部会の取組	・ ・ ・ ・ 1 5
III	研究のまとめ	
1	研究の成果	・ ・ ・ ・ 1 7
2	研究の課題と今後の志向	・ ・ ・ ・ 2 0

おわりに

## I 研究の概要

### 1 研究主題

# 生徒の主体的な学びへの転換

～サンタの学習過程の実践を通して～

### 2 研究主題について

益城町では、「夢実現！益城町ドリカムアクションプラン」の下、重点取組事項を設定し小中連携の研究実践に取り組み始めた。今年度は、昨年度までの益城中学校区「学力向上」指定研究での成果を土台として、県・町の取組を根幹に据えながら、本校の実態に応じた様々な共通実践を図っていきたいと考えている。

本校においては町の取組を根幹に据え、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学習」を「主体的な学び」と捉えることとした。「主体的な学び」を得る場面として、特に授業に焦点を当て、学習過程の工夫・実践を中心に研究を進めたいと考え、サブテーマを設定した。

### 3 研究主題設定の理由

#### (1) 「熊本の学び推進プラン」「益城町ドリカムアクションプラン」から

令和元年12月に熊本県教育委員会より示された「熊本の学び推進プラン」に提言されている、「熊本の全ての子供たちが『学ぶ意味』を問いながら『能動的に学び続ける力』を身に付けること」を本校でもすべての教育活動、特に授業場面で実現させたいと考えた。そのために、益城町教育委員会が令和3年度から推進している「夢実現！益城町ドリカムアクションプラン」の実現、「サンタの学習指導過程」の実現を目指し、様々な取組を展開したいと考えた。

#### (2) 本校の教育目標等から

本校の本年度の教育目標は、「自ら学び 自他を大切にして 共に未来を創造する生徒の育成」である。その実現のために、「主体性と意欲を高める学習環境づくり」、「自他が尊重される人間関係・環境づくり」、「安全で安心できる学びの場となる環境づくり」の3つを柱に教育を展開していくこととしている。本研究の取組は、教育目標の具現化を担うものであると考えた。

#### (3) 生徒の実態・職員の実態から

本校の生徒の昨年度末時点での学力実態は、県学力・学習状況調査（以下、「県学調」とする）の結果、「概ね良好」となっている。しかし、いくつかの教科では全国

と比較して正答率が下回っており、特に英語に課題がある。また、県学調の質問紙等の結果、自己肯定感や他者受容、規範意識、家庭学習等に関して、県や全国の実態と大きくかけ離れて低い結果があった（資料 2）。また、本年度は例年にも増して職員間でのキャリアの差が大きく、授業づくり・学級づくりの視点での OJT による職員相互の学び合いも必要不可欠である。学級経営や仲間づくり等の研修を行い、学習指導を超えて学級づくりでも共通実践事項を決め徹底し、学校総体となって組織的な学習集団づくりを進めていきたいと考えた。

質問項目	現 2 年県比較	現 3 年県比較
1 あなたのクラスでは、みんなが掃除当番や係の仕事を、責任をもってしていますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」）の割合	-19.6	-13.8
2 あなたは地球上でたった一人の、あなたのことを大切に思っている人々にとって、かけがえのない存在であるということを知っていますか？ （「はい」＋「どちらかといえばはい」）の割合	-3.6	-14.3
3 学校の授業以外に、平日（月～金）1日どれくらいの時間、勉強をしますか。（「 <u>全くしない</u> 」の割合で、 <u>低いほどよい</u> ）	+7.1	+14.3

資料 2 昨年度の県学調質問紙の結果、大きな課題が見られた項目

#### 4 研究の仮説

- (1) 「熊本の学び推進プラン」「益城町ドリカムアクションプラン」を根幹に据え、全職員で「たのしい」「ためになる」「ためしなくなる」授業づくりを実践する授業改善を進めれば、学力向上が期待されるであろう。
- (2) 様々な学習習慣・環境づくりを推進すれば、授業改善との相乗効果により更なる学力向上が期待されるであろう。
- (3) 英語教育の授業づくり・環境づくりを推進すれば、英語の学力向上が期待されるであろう。

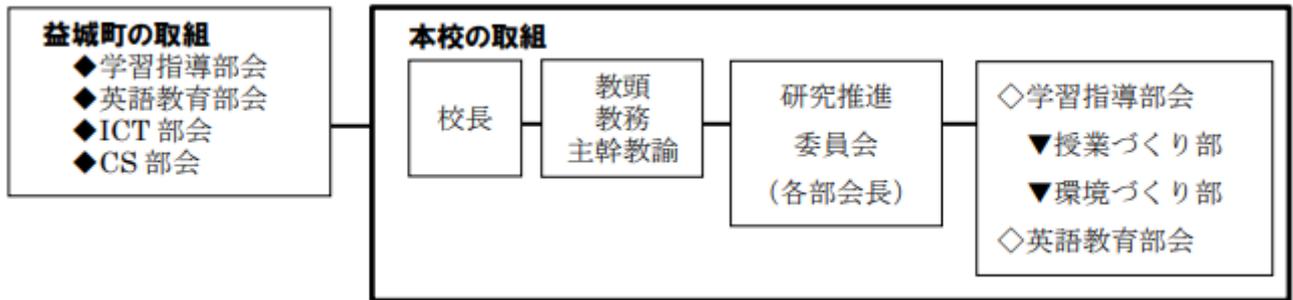
#### 5 研究の方法

仮説を検証するために以下の 3 つを組織し、部会間で連携しながら取組を進めることとした。

- (1) 学習指導部会 授業づくり部 …… 仮説 (1) に対する取組を行う
- (2) 学習指導部会 環境づくり部 …… 仮説 (2) に対する取組を行う
- (3) 英語教育部会 …… 仮説 (3) に対する取組を行う

また、必要に応じて取組を推進するために教科会や部会内で組織をつくり研究の推進に努めることとした。

## 6 研究組織と主な活動内容



資料3 研究組織図

### (1) 学習指導部会

#### ① 授業づくり部

授業づくりの推進、学習規律指導、公開授業・研究授業の運営、事前検討会の運営、小中連携、研究の取組の成果と課題の検証・情報発信、校内掲示、成果指標（県学力調査・研究推進アンケート）の設定・検証

#### ② 環境づくり部

効果的な家庭学習・学習習慣づくりのための取組の検討・発信、学びを支える学習環境づくりに関する取組の検討・発信、研究の取組の成果と課題の検証・情報発信、校内掲示、成果指標（県学力調査・研究推進アンケート）の設定・検証

### (2) 英語教育部会

英語教育に関する授業づくりの推進、公開授業・研究授業の運営、事前検討会の運営、家庭学習の検討、英語教育に関する成果と課題の検証・情報発信、校内掲示、成果指標（県学力調査・研究推進アンケート）の設定・検証

## II 研究の実際

### 1 学習指導部会の取組

#### (1) 授業づくり部の取組

授業づくり部では、日頃からどのような授業実践を行うことが生徒の学力向上につながるのか、生徒の実態を踏まえながら、職員集団で議論し、取組内容を決めて共通実践した。

#### ① 「生徒の主体的な学び」を具現化するための「サンタの授業実践上のポイント」

##### ア サンタの授業実践上のポイント

2020年度に始まった「熊本の学び」として、子供たちを「学びの主人公」として育て、「わくわく」が連続し、学んだことを次の学習や実生活に生かそうとする授業を行っていくことが提言された。本校の研究テーマである「生徒の主体的な学び」も子供たちを「学びの主人公」として捉えており、それを実現するために益城町教育委員会から「サンタの学習指導過程」に基づく「サンタの授業実践上のポイント」(資料4)が提案された。本研究部でも「生徒の主体的な学び」を具現化するために、「サンタの授業実践上のポイント」を共通実践していくこととした。さらに、共通実践事項が授業展開に盛り込めるように、「めあて」「課題」「セルフトーク」「チャレンジタイム」「まとめ」「振り返り」の短冊をつくり、板書に生かすようにした(資料5)。

##### ＜ 小中連携した授業改善のアイデア ～主体的な学びへの転換 ＞

- 1 単元や各授業における目標のイメージ化を図り、行動目標を設定する。
- 2 児童生徒が「自分の考えを、自分の言葉で、分かり易く伝える力」を鍛える。
- 3 読む発表から、資料等を活用して自分の考えを伝える発表への転換を図る。
- 4 セルフトークの時間を設定し、資料やKWを使い分かり易く伝える練習をする。
- 5 チャレンジタイムの時間を設定し、行動目標に対する個々の学習成果を確かめる。

##### ＜ たのしく、ためになり、ためしてみたいなるサンタの学習指導過程 ＞

##### 《 自分の考えを 自分の言葉で 分かりやすく説明する! 》

- 1 導入で「本時で何ができるようになればよいか」を明確に伝え、板書する。
- 2 学習活動では、①活動のねらい ②手順 ③留意点をきちんと理解させる。
- 3 発問後、自力解決の場を必ず設定し、自分の考えを自分の言葉でまとめさせる。
- 4 共同解決の場を設け、本時の目標に向かって学び合い高め合う授業を展開する。
- 5 チャレンジタイム等を設定して、本時の目標に対する評価を具体的に実施する。

##### ＜ サンタの授業実践上のポイント1.0 ＞

- 1 本時の目標:「～ができる。」学習が、具体的に評価できる「行動目標」を設定する。
  - 2 導入:「日常生活」に関連させ、「何ができるようになればよいか」理解させる。
  - 3 学習活動:「活動のねらい・活動の手順・活動上の留意点」を明確に伝える。
  - 4 思考力・判断力:課題解決に向け、情報を収集・活用し「自分の考え」を持たせる。
  - 5 表現力:「自分の考え」を「自分の言葉」で、資料やKWを使ってまとめる力を育む。
  - 6 セルフトーク:相手意識を持ち、「分かり易く」伝える為の「実践練習」をさせる。
  - 7 発表:「KWや資料等」を活用して、読む発表から伝える発表への転換を図る。
  - 8 練り上げ:個々の考えを「本時の目標」に向かって、学び合い高め合わせる。
  - 9 チャレンジタイム:「本時の学習が身に付いたか」練習問題等に楽しく「挑戦」させる。
  - 10 まとめ:「キーワード」等を活用して、本時の目標に沿った「まとめ」をする。
- 評価A:「本時の目標が達成できたかどうか」児童生徒自身に「自己評価」を行わせる。  
評価B:教師は、「チャレンジタイム」や「自己評価」を見て「指導に対する評価」を行う。

資料4 サンタの授業実践上のポイント



資料5 サンタの授業の板書

## イ 大研・研究授業

共通実践の実現のためのアイデアを職員が相互に学んだり、考え方・捉え方をすり合わせたりする場として、年間を通して定期的に研究授業を行った。全員参加の大研は年に5回行った。大研実施にあたっては、研究推進委員会で学習構想案の事前検討会を行った。事前研は模擬授業形式を取り入れ、発問や評価、展開などについて具体的に協議できるようにした。

大研の授業参観では、生徒が教師の発問・指示に対して生徒がどのようなワークシート、つぶやき、班での発言をしているのかを見た。また、事前検討会で作成した「授業参観シート」(資料6)を元に参観する視点を明確にして、授業の記録をした。研究協議会では3部会を7グループに分け、参観の視点による授業の振り返りと各自の実践について話し合いを行った。

### ② 学習指導全体計画に沿ったPDCAサイクルプラン

年間を見通して学力向上を図るために、前年度末に学習指導全体計画を作成した。学習指導の中で重点的に取り組む内容や諸学力調査への段階などを月ごとに設定し、計画的な学力向上を目指した。

#### ア 授業参観月間

学習指導全体計画の中に、「個別指導強化月間」「『まとめ』強化月間」「『振り返り』強化月間」「『学び合い』強化月間」などを設定し、いくつかの重点的な学力向上のためのポイントを月ごとに絞った。その中の一つに「授業参観月間」を位置付けている。「サンタの授業実践上のポイント」に対する理解を深め、職員の授業力向上を目的に設定した。この期間はどの授業も参観可能で、普段気になっていることや悩んでいることを気軽に話せる機会とした。また、時間割に参観時間を位置付け、必ず参観できるようにした。参観する時には、大研・小研で使用している「授業参観シート」を活用し、質問や悩みなどを話しやすいようにした。

令和6年度 授業参観シート【令和7年1月15日(水) 2-4 係体 研究授業】  
名前 ( )

1 サンタの授業上のポイント10のうち、★がついている「今日の中心視点」について4・3・2・1の4段階で評価してください。

	チェックポイントの内容	本時の ポイント	評価
導入	視点1 【めあて】を確認して授業を受けている(めあては「〜できる」という表記)	★	⌋
	視点2 日常生活に関連づけ、行動目標を理解している。【導入】		
学習活動	視点3 「活動のねらい」「活動の手順」「活動の留意点」を理解している。【学習活動】	★	⌋
	視点4 課題解決に向け、情報を収集・活用し、自分の考えを持って課題に取り組んでいる。【思考判断】		
	視点5 「自分の考え」を「自分の言葉」で、資料やキーワードを使ってまとめている。【表現】		
	視点6 相手意識を持ち、「分かりやすく伝える」ための「実践練習」をしている。【セルフトーク】		
	視点7 「キーワードや資料」を活用して、相手意識を持った発表をしている。【発表】		
	視点8 個々の考えを、「本時の目標」に向かって、学び合い高め合っている。【振り返り】	★	⌋
まとめ	視点9 「本時の学習が身についたか」を練習問題等で楽しく「振り返り」している。【チャレンジタイム】	★	⌋
	視点10 「キーワード」を活用して、本時の目標に沿ったまとめをしている。【まとめ】		

2 サンタの授業上のポイントの中心視点や、協議の視点【学習が親やかに進む生徒も含め、全員が課題解決できるための手立て】についての意見や気づきなど

良かった(参考になった)ところ	△聞いてみたい(改善してほしい)ところ

3 全体を通じた感想・明日からの授業改善に生かせそうなこと・授業者へのメッセージ  
 課題解決に向けた取り組みが、生徒の学び合いの場を、ポイント(本)の活用や  
 ツール(学習)の活用、生徒の学び合いの場を、自分の授業にも活かせる  
 ことが、今後の授業の改善に、大きな役割を果たすことが、期待される。

4 本年度の研究推進についてのご意見やご質問等があれば自由にお書きください  
 今年度は、授業参観シート、お話し合いの場を、活用して、授業  
 参観が、とても、おもしろい。来年度、活用してほしい。

資料6 授業参観シート

イ 全国学力・学習状況調査の結果を受けた重点取組の設定および実施

全国学力・学習状況調査（以下、「全学調」とする）の結果を受けて、課題改善に向けた本校の重点取組の目標を「生徒が主体的な学びを実現できる授業を実践することができる」とした。また、県の3つの重点指標に加え、「家で勉強するときは、自分で計画を立てていますか」を学校で設定し、4つの質問紙の肯定回答の数値向上を目指すことで学力向上につなげることを目指した。また、全職員がそれぞれ重点指標に対する重点取組を設定し、授業や学習指導の場面で実践を重ねた（資料7）。

The image shows a comprehensive action plan document. At the top, it states the school's goal: 'Students can realize independent learning and practice effective lessons.' Below this, it lists key indicators and current performance metrics. For example, the 'R6 national survey results' are 75.1%, and the 'R6 school results' are 74.8%. The document is divided into several sections, each with specific action items and handwritten notes. One section focuses on 'Establishing learning activities' with notes like 'Establish a system for students to understand the lesson content.' Another section focuses on 'Improving lesson content' with notes like 'Establish a system for students to understand the lesson content.' The document also includes a section for 'Improving lesson content' with notes like 'Establish a system for students to understand the lesson content.'

資料7 音楽科教諭の全学調を受けた重点取組

ウ 「上益城の人づくり」プロジェクト～R6～目標値設定および啓発

上益城教育事務所より、「上益城の人づくり」プロジェクトが提言されている。これは「熊本の学び」推進プランを受けて、キャリア教育の視点から学力向上に迫ることを目的に、県学調の質問紙項目の中で上益城教育事務所が独自に抽出した6つの項目と学力調査結果を向上させることを目指している。令和5年度の調査結果を受けて、数値目標を設定し、その達成に向けて様々な取組を進めることとした。また、保護者にも学年・学級懇談等で知らせ、現状と目標の共有を行い、家庭でもできる関わりをお願いした。

## エ 学力向上月間

「学力向上月間」は、定期考査が行われる月や諸学力調査が行われる月に設定している。諸学力調査の問題が、今日の教育に求められる様々な力を用いて解く必要があることに着目して、定期考査時には、問題の中に諸学力調査の過去の問題を参考にした類似の問題を全教科・全学年で必ず位置付けることとした。また、そのような問題を解くために必要な力を身に付けることができる授業を目指した。

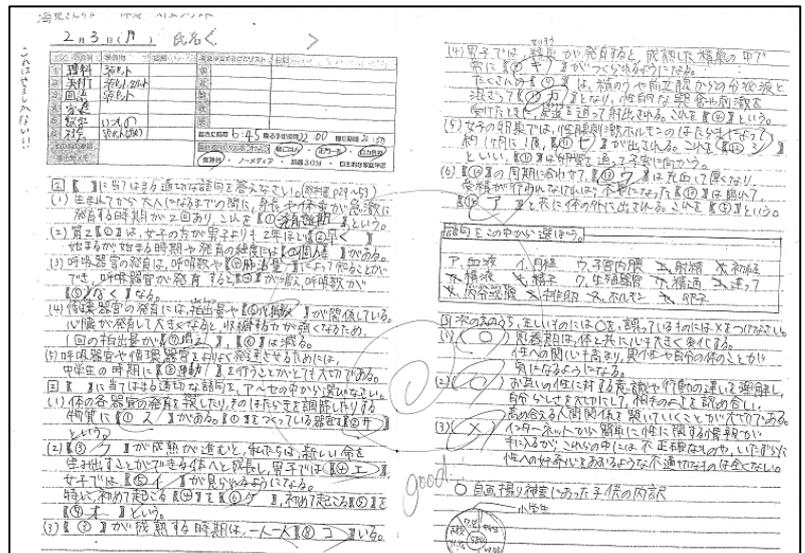
## オ 学習クラスマッチ

学習と学校行事を関連させた取組として、学習クラスマッチを実施している。1学期は、漢字クラスマッチ、2学期は英単語クラスマッチ、3学期は計算クラスマッチと内容を設定し、クラスの平均点を競い合うことで、学校全体で学習に取り組む雰囲気向上をさせることを目指した。

クラスマッチで出題される問題が発表されてから本番までの期間は、生徒たちの学習意欲の向上に良い効果を与えたことが、取組を終えた後の職員の感想から確認することができた。特に、学習習慣に関して、「休み時間に学習する姿が見られた」や「学習が苦手な生徒も毎日家庭学習に取り組むことができていた」などの声を聞くことができた。クラスに貢献したい気持ちや、出題される内容があらかじめ分かっていることにより学習内容が明確であることなどが、主体的に学習するという行動につながっていたと言える。

## カ 学習教育相談・全校学習会の実施

本校生徒の課題の一つに、家庭学習の習慣化が不十分で、家庭学習にかける時間が少ないことが昨年度の生徒質問紙の結果から明らかになっている。この結果には家庭学習のやり方が分からないということも起因していると考え、朝自習の時間を利用し



資料8 生徒が作成した家庭学習プリント

て担任が個別に学習面についての様々なアドバイスをする教育相談を実施した。家庭学習ノートの効果的な例を示したり、苦手な科目の克服方法の例を示したりするなど、内容は生徒個々に合わせてアドバイスを行った。すると、家庭学習のやり方が分からない生徒に向けて、生徒が家庭学習プリントを作成し(資料8)、アドバイスするなどの姿も見られるようになった。作成する生徒も、「シートを作成することが自分の勉強になっています」と、互いに学び合う姿が見られた。

また、3学期は「数学朝から学習会」と題して全校生徒を対象に学習会を行っている(資料9)。毎朝7時30分から始業までの30分間を自習室として開放し、分からない問題を気軽に聞くことができる場を設定した。1日あたり40人程度の生徒が参加しており、



資料9 数学朝から学習会  
参加人数は増加傾向にある。また、受験を控えた3年生が面接指導を希望したり、入試過去問の解法のアドバイスを求めに来たりするなど、主体的な学びの場が広がっている。

## キ 教科会

授業についての意見交換の取組の一つとして、授業参観月間以外に、教科会も実施している(資料10)。本校の特徴として、職員数が多く教科ごとに複数の職員が存在することが挙げられる。それを生かし、教科会を学期に1度定例実施し、教科の専門性を高めることや、生徒の実態をつかみ授業を改善させる取組を行った。



資料10 教科会

本校の生徒は、授業中にお互いに教え合う時間の多さを感じている反面、他者の意見を聞いて面白いと感じたり、深まったと感じたりする生徒は少ないという実態がある。そこで、授業の中で班活動を行う際に、どのような学習活動に取り組みせることで生徒が面白いと感じたり、考えが深まったと感じたりすることができるのかを各教科の教科会での話題の柱にしてもらい、各教科の授業で取り組まれる班での学習をどのように行うのか、授業者の授業改善の材料としていった。

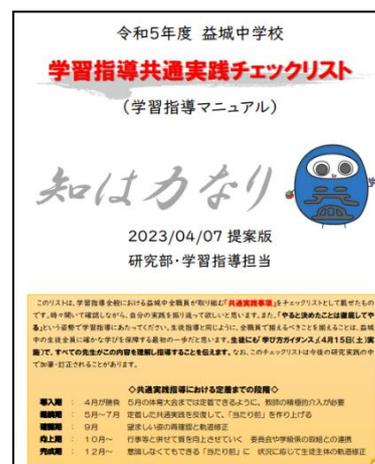
他にも、教科会では、定期テストの作成に関する情報交換や、諸学力調査の結果分析をもとにした授業づくりに向けての意見交換などにもつながっており、目的をもって実施していくことで価値のある取組となってきている。

### ③ 学習規律指導

#### ア 学習指導共通実践チェックリスト

学習指導を学校総体として進めるにあたって、「学習指導共通実践チェックリスト」(資料11)を4月最初の職員会議で提案・配布し、共通認識のもと、年間の見通しをもって段階を追って学習指導にあたるようにした。

学習規律とは、生徒たちが自主的な学習活動を進めるにあたって必要となるルールやマナーである。例えば、登校時の朝の挨拶にはじまり、始業開始とともに着席したら、正しい姿勢で机に向かい、教師や他の生徒の話に耳を傾け、自らも積極的に授業に参加するよう促すことなどである。どれも基礎的なものではあるが、全学調の結果で学力低位層の割合が減少した学校では、学習規律の維持の徹底をしている割合が増加していた結果からもわかるように、学習規律を徹底することは学習者全員が学習に向かえる授業づくりを行う上で欠かせない指導である。本校の規範意識が低いという実態を踏まえても、丁寧な共通実践をする必要があった。学習指導共通実践チェックリストはその一助となるものである。



資料11 学習指導共通実践チェックリスト

#### イ 学び方ガイダンス

学習規律を徹底するため、学年部ごとに生徒に向けて研究主任による学び方ガイダンスを行った(資料12)。教師と生徒が学びに向かう姿勢を共通理解し、職員と生徒が一体となって本校の「学び」の課題を解決していこうとする態度の醸成につながることをねらいとした。



資料12 学び方ガイダンス

ガイダンスでは、はじめに日本の現在と未来の姿を共有し、本校の「学び」に関する現状と課題を説明した。「予測不可能な社会」「非連続的に劇的に変わる社会」に対応できる学びになるよう、益城中のスタンダードとなる学習規律や学び方を知らせた。内容は職員向けに共有している「学習指導共通実践チェックリスト」の中から生徒と共有したいことを中心に、各学年の実態に合わせて変えている。ガイダンスを研究主任が一括して行うことで、学習に対する姿勢や取組、環境をどの学年にも温度差なく共通認識を図ることができた。

## ④ 道徳教育の推進

### ア 講師招聘による道徳の授業づくりの充実

道徳の授業力向上についての取組も行った。年間5回の大研の第1回目に、道徳の授業を行った。本校では教科の専門性にとらわれることなく、授業づくりという視点で研究授業を参観するよう



資料13 道徳授業づくり研修

にしているが、道徳はその意味では、より全職員が授業に関する意見交換をしやすいという側面がある。実際に授業研究会でも職員の経験やこれまでの実践から意見が多く出た。また、熊本県立教育センターより指導主事を講師として招聘し、道徳の授業づくり研修（資料13）も行い、そこで得られた学びやアドバイスをもとに授業づくりを行った。

### イ ローテーション道徳

前述した指導主事による提案を受けて、担任が行うことが多い道徳の授業を、他のクラスの担任が授業を行ったり副担任による授業を行ったりする、教師をローテーションした道徳の授業にも取り組んだ。普段の道徳の授業では1つの内容を複数回することはないが、7学級で1度ずつ授業することで道徳の指導力の向上や授業の工夫改善ができた。また、担任とは違う価値観に触れることで様々な角度から道徳性の涵養を目指すことができた。授業づくりや学級の様子意見交換の中で、職員間の仲間づくりもできたとの声が多く聞かれた。道徳主任と連携し、今後その成果と課題を整理し、来年度は計画的に全学年で実施する予定である。

## ⑤ 個人の課題別研究

職員間の教職経験の差やキャリアステージの多様性ゆえに、それぞれに教職としての課題意識や伸ばしたいと思う力が違う状況がある。そこで、共通実践と並行して個人の課題別の研究テーマを設定し、1年間かけてその克服・実現に向けて取組を行うことにした。テーマに合わせて成果指標をそれぞれが設定し、個人でPDCAサイクル検証ができるようにした（資料14）。その一助となるよう、研究部から先行研究や事例の提供等を行った。年度末の最後の校内研修では、小グループで研究発表会を行う予定である。この一連の取組により、教職としての自らの課題の解決に向けた取組を振り返り、成果と課題を明らかにすることができるのと同時に、個々の実践を持ちより、お互いの実践に学び合ったり、来年度重点的に取り組むた

いことを決め来年度の実践につなげたりすることができることを期待している。

令和6年度益城中学校校内研究 個人課題別研究	
氏名	大倉 典子
テーマ分類	A 教科指導
研究テーマ	目標や課題を明確にし、子どもたちが目標達成に向けて主体的に取り組む姿
テーマ設定の理由 年度末になりたい姿	英語は3年間を通して、他教科と比べて苦手意識を持つ子どもが多い。英語を使用する必要性を日常生活で感じられず、なかなか意識の向上に結び付かないのが現状とある。子どもに「分かった」「できた」が感じられない授業は、目標や課題が明確ではないと考えられる。1単元の授業を通して、何ができるようになれば良いのか。目標や課題を達成・クリアすることで、新たな言語習得の楽しさを感じられるように、この研究テーマを設定した。
↑ 実現のための 1学期の取組の具体	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元のゴールを各Unitごとに明確にする</li> <li>(ほぼ)毎時間めあてに対する課題を設定し、生徒自身でまとめや振り返りができるようにする(振り返りシートの準備・記入の徹底)</li> <li>帯活動の充実(チャンク)</li> <li>サンタを意識した授業作り(プレゼンソフト等を使った飽きない授業展開)</li> </ul>
成果指標	<ul style="list-style-type: none"> <li>振り返りシート、観察</li> <li>生徒から教師の授業への評価(通知表)</li> <li>パフォーマンステスト</li> <li>単元テスト</li> </ul>
10月現在の進捗現状 (11/6 校内研で記入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元ゴールを明確にすることで、単元を通して何ができるようになるかを確認し、見通しを持つことができた。ALTに動詞の過去形を使って夏休みにしたことや三単現を使って他己紹介をするなどの活動を行うことができた。</li> <li>めあては毎時間設定することができたが、まとめや振り返りの時間確保が不十分だった。</li> </ul>
11月・12月の志向 取り組みの具体 (11/6 校内研で記入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元ゴールを明確にすることで、単元を通して何ができるようになるかを確認し、見通しを持たせるために、ALTに対して発表を行う。</li> <li>まとめや振り返りの時間の確保</li> <li>パフォーマンステストの充実(単元テストや発表以外の活動)</li> <li>たてよこドリルを使用した帯活動の充実</li> </ul>
2学期終了時点で現状 (1/8 校内研で記入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ALTに三単現を使って他己紹介をするなどの活動を行うことができ、発表においては充実した活動を行うことができた。</li> <li>授業時数の確保や授業の進捗もあり、単元のゴールを設定することができない単元が生じた。</li> </ul>
3学期の志向 取り組みの具体 (1/8 校内研で記入)	<ul style="list-style-type: none"> <li>単元ゴールの設定(何ができるようになるかの確認、振り返りシートの使用)</li> <li>パフォーマンステストの多様化(発表、単元テストに限らず、即興で話すなど応用化したものを実施できるようにする。ALTがいる1月3月中心に)</li> <li>サンタを意識した授業を継続して行う</li> </ul>
研究の成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>新しい単元に入る0時間目は必ず単元ゴールを設定し、何ができるようになるのか目標を確認し、振り返りシートを配布した。振り返りシートを日本語だけでなく、英語で書かせるなど生徒の習熟度に応じて取り組ませることができた。県学力調査の結果より、毎年課題であった「書くこと」における数値は県平均を上回ることができた。</li> <li>パフォーマンステストで「話すこと」に偏ってしまい、3学期に「書くこと」を実施した。更なる多様化とゴール設定の目的(何のために)を細かく設定する。</li> <li>プレゼンソフトを使った授業や場面状況理解のための動画を適宜取り入れることができた。</li> </ul>
研究の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>バックワードデザインを意識した単元ゴールの設定</li> <li>県学力調査の県平均を上回ったが、全国平均を上回っていない。</li> <li>他の領域に比べると「読むこと」の定着が弱い</li> <li>家庭学習の取組</li> </ul>
考慮 次年度に向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>バックワードデザインを意識した単元ゴールの設定(相手意識、ALTばかりでなく多様な相手の設定)</li> <li>県学力調査の県平均を上回ったが、全国平均を上回っていない。</li> <li>「読むこと」への指導</li> <li>家庭学習の取組指導</li> </ul>

※必要に応じて実践の資料や写真、ワークシート、スライド資料を添付してください。(改め準備をする必要はありません)

※2月26日の校内研修で小グループに分かれて研究発表会を行います。学年末テストや成績処理。

#### 資料14 課題別研究ワークシート

### (2) 環境づくり部の取組

環境づくり部では、学力向上を支える様々な環境の整備のために、生徒の実態を踏まえながら、職員集団で議論し、取り組む内容を決めて共通実践している。

#### ① 校内成果指標の設定

毎年、諸学力調査の結果を成果指標として研究を進めるが、対象学年のデータしか得られなかったり、年度内の変化を見取ることができなかったりするなどの課題があった。そこで本年度は、県学調の質問紙と同じWEBアンケートを独自に作成し、それぞれの学期末に全校生徒に回答させた。3つの部会ごとに、取組の成果を確かめることができる指標としていくつかの質問項目を決め、数値変容を見ていくこととした。WEBアンケートを活用することで、数値上昇・下降の分析や現状の把握を具体的に確認することができただけでなく、例年ならデータを得られない学年も評価の対象にすることができたり、アンケート実施後すぐに指導に生かしたりすることができるようになった。

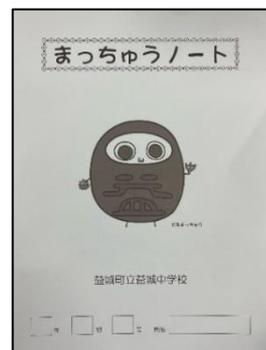
#### ② 学習習慣づくりのための生活習慣の改善

学習習慣は、生活習慣が大きく影響している。昨年度の県学調質問紙の結果、1

日あたりのスマートフォン・タブレット端末を4時間を超える割合が県と比較して約2倍いる現状が明らかになった。学校での学習指導だけでなく、生活習慣の改善も同時に進めなければ望ましい学習習慣づくりができないと考え、様々な角度から生活習慣の改善を目指した。

## ア 帰りの会での学習計画時間の設定と「まっちゅうノート」の活用

これまで本校では、家庭学習の習慣化に向けて、生徒たちが毎日の授業の復習を中心に学習し、毎朝ノートを提出することを実践してきた。しかし、家庭学習の内容を自分で決めることが難しかったり、家庭学習の内容に教科の偏りが出てきたりするなどの課題があり、そのことが質問紙調査で明らかになっている。「上益城の人づくり」プロジェクトの重点指標にもなっていることから分かるように、本校でも家庭学習の計画的な実施は大きな課題であった。そこで、本年度は、家庭学習の



資料16  
まっちゅうノート

計画を立てる機会を帰りの会で設けるようにし、円滑に家庭学習につなげる実践に取り組んだ。また、その計画がしやすいように独自の家庭学習ノート「まっちゅうノート」(資料16)を作成した。全学級、帰りの会の5分間で「まっちゅうノート」の計画表(資料17)を記入し自ら学習計画を立てる時間を設定している。自ら学習計画を立てることができるようになることと、生活習慣の改善や意識向上を目指して生活に見通しを持つことを目指した。

の教科	準備物	宿題	家庭学習することリスト	日記
1 社会			国 竹取物語	今日保体の発表会がめ
2 数学			社	りました。タブレットで発表
3 英語	タブレット		数	会するときする種目をおくるの
4 技術			理 金属の性質	を忘れていてかみに書いて
5 音楽			英 本文	だしたのでできたからとどか
6 国語		84~89	起きた時間 6:30 寝る予定時間 10:30 寝た時間 10:10	
その他の連絡 提出物メモ			達成項目にマルをつけよう 無遅刻 ・ ノーメディア ・ 読書30分 ・ 自主的な家庭学習	朝ごはん ・ 正門一礼 ・ 自力登校

資料17 まっちゅうノートの家庭学習計画表

この取組によって、これまで課題であった家庭学習の内容を決めることの難しさを感じていた生徒や、学習内容に偏りがあった生徒が家庭学習の記録を続けることで、家庭学習の内容に向き合い、考えて取り組む姿が見られるようになった。

町内の研究主任が集まる会でこの取組を紹介したところ、校区の小学校の先生方も興味を持っておられ、導入を検討するということであった。今後、家庭学習に関しても小中連携によりさらに学力向上へ繋がると考える。

### ③ 生徒会委員会・学習委員会との連携

委員会の活動と組み合わせることで、学習指導であっても「先生に言われたからする」のではなく「自分のためになるからする」への主体的転換をねらった。各委員会が始業3分前着席の呼びかけや忘れ物チェック、3秒礼のクラスマッチを行ったりするなど主体性をもって活動している。委員会の活動と組み合わせることで、学年やクラスに関係なく共通理解でき、職員も指導がしやすくなった。また、委員会の活動からインスピレーションを得てクラスでも班マッチを企画して、学習態度の相互評価を行い、クラスの学習する雰囲気向上させたクラスもあった。特に学習委員会は、学力向上に向けた様々な取組を行った。学習委員会の取組の中で、職員と連携した主な取組を紹介する。

#### ア 学習目標の掲示

毎月初めに生徒主体で学習目標を設定し、生徒が主体的に学習に向かう雰囲気を醸成することを目指した。毎月の委員会活動の中で各クラスの学習に取り組む様子を出し合い、現状から目標を設定した。例えば、学力調査やテストを控えたときには、その事前の取組の意欲向上を目指して目標を設定した。特別教室を含む全ての教室に掲示して意欲向上を目指している。

#### イ テスト予想問題

学校全体の学習意欲や学力の向上を目指してテスト予想問題を作成した。学習委員が各教科担当に聞き取りを行い、取り組み方のアドバイスを受けて内容を充実させている。作成した予想問題はテスト前の朝自習の時間に学校全体で取り組んだ。問題を解くことで学習内容が理解できることを目指した取組であったが、問題をつくる経験も学習に主体的に取り組む態度の育成に好影響を与えている。生徒同士で出題者に質問をしたり、予想問題を解説する授業を行ったりなど、生徒と教師がお互いに主体的な学びを実現するのに役立っている。

## ウ 3年生に学ぶ会

2月末から3月頭にかけて、「3年生に学ぶ会」を実施する予定である。受験を終えた先輩から学習面や生活面のアドバイスを1・2年生が直接受ける機会として設定した。普段は教師からのアドバイスを受けることが多い生徒たちであるが、受験について最近まで取り組んでいた先輩からの生の声は受け取り方も変わ



資料18 昨年度の様子

ってくる。昨年度も同様に実施した（資料18）が、生徒からも好評であった。学力向上のきっかけを教師が主導する場面は必要である。しかし同時に、身近な存在からの刺激は、より主体的に学ぶ意欲に繋がっている。

### ④ 学級づくり研修

本年度、通常学級21学級のうち、初めて担任を担当する職員が担任である学級が3学級、初任以降3年経っていない職員や、講師が担任する学級が12学級ある。学級経営や学習指導、生徒指導、生徒同士の仲間づくりに不安感や困り感を抱える担任も多かった。安心して学ぶことができない学級の中では、望むような学力向上、主体的に学ぶ姿は見られない。学級づくりにおいても職員への研修の場を設定することで、学校総体としての学力向上に大きく寄与すると考えた。

#### ア 学級経営研修

4月に学級経営についての職員研修を行った。担任としてのキャリアをある程度積んだ数名の職員が、担任業務の基本的な考え方や、学級の班組織の活用の仕方などについて教えたり、疑問に答えたりする場を設けた。学級経営の中で大切にしていることや、学級のルールづくりや班活動を軸とした具体の実践モデルを示すことで、初めて学級担任をする職員の不安感の軽減や、困り感の解決につながった。担任研修をきっかけにして、その後も職員同士での情報交換やそれぞれの工夫や悩みなどの共有に繋がったことも多く、年間を通してお互いの実践に学び合う土台をつくることができた。

## イ 仲間づくり研修

夏季休業中には「仲間づくり研修」と題して、青少年赤十字の活動の一環として研修を実施した（資料19）。青少年赤十字とは、生徒が赤十字の精神に基づき、世界の平和と人類の福祉に貢献できるよう、日常生活の中での実践活動を通じて、いのちと健康を大切に、地域社会や世界のために奉仕し、世界の人々との友好親善の精神を育成することを目的とした様々な活動を推進する団体である。今回は構成的グループエンカウンターを実際に職員同士で体験し、2学期以降のクラスの中での仲間づくりや生徒会活動に生かすことができるようにした。夏休み明けの始業式の学活で、多くの担任が実際に生徒と一緒にしており、温かい仲間づくりの方法の実際を学ぶことができた。この学びを生かして、各担任が継続的に学級での仲間づくりを推進できた。



資料19 仲間づくり研修

### （3）英語教育部会による独自の授業づくり共通実践

英語教育部会では、特に英語の教科に絞って学力向上のための取組を推進している。熊本県が英語教育日本一を目指していることや、本校の学力実態の中で特に力を入れる必要がある教科であることもあり、教科を独立させて部会を設定した。また、益城町の取組の中でも小中連携に特に力を入れている。

本校の課題として、学年が上がるにつれて、英語の理解度が下がることが原因で「英語が好き」と答える生徒が減少することがあげられる。そのため、1年時に基礎・基本を徹底させることが大切であると考えた。授業の始めに行う帯活動の工夫や、音読活動によるインプットの徹底、家庭学習の充実に取り組みながら基礎・基本の定着を図りたいと考えた。また、自己表現をする活動をチャレンジ問題として設定し、本校の課題である「話したり、書いたりする力」を高めたいと考えた。

#### ① 動詞句チャンツの活用

一昨年度から小中連携で行っている「動詞句チャンツ」においては、小学校時に50個、中学校でプラス50個の、計100個を、帯活動としてチャンツや歌などを活用し授業の最初に繰り返し行って、英語のリズムに慣れさせた（資料20）。小学校の音声指導をう



けて、中学校では、ビジュアルツール（写真やイラストなど）を活用しながら、学習した後、文字につなげた指導を、共通理解した上で指導を行った。また、小テストを行い、実際の場面で活用したり、書くことにも慣れさせたりする指導を行った。小学校との連携もあり、特に1年生においては、音声指導をスムーズに行うことができ、実際の使用場面でスムーズに活用できている場面が多く見られた。また、2・3年生においては、文法の指導事項も難しくなるので、全ての動詞句チャンツを使用するのではなく、いくつか絞って指導することもあった。

資料20 動詞句チャンツ

## ② 音声から文字への指導

「音声から文字へ」の指導過程においては、新しい表現の導入の際には、身近な場面を設定して、生徒の興味・関心を喚起するために工夫を行った。1年生の授業では「夏休みにしたことをALTの先生に伝えることができる」を目標に設定し、実際に伝える活動を行った。特に今年度は、益城町内英語の授業で音のリズムや強弱を意識させることを重点化しており、板書した英文で特に意識して強く発音してほしい単語の上に印を付け、視覚化することで、子どもたちにも分かりやすく示すことができた。音やリズムを大事にした帯活動を通して、生徒が楽しく基礎・基本の定着を図ることができた。特に1年生は、小学校から音やリズムを大事にした学習を重ねているため、中学校でも音から入ることを意識したり、リズムで楽しく覚えることを帯活動で続けたりすることで、語彙や表現が少しずつ定着した。

## ③ 公開授業・研究授業の実施

提案授業として、1年生の英語の授業を大研として行った。また、郡教科等研究会でも、同じく1年生の英語の授業を行った（資料21）。「ALTの先生に日本の中学生の夏休みを知ってもらうために、夏休みに体験したことを伝えよう」という単元目標に向けて取り



資料21 研究授業の様子

組んだ。Unit 5に入る際に、ALTが夏休みの体験やアメリカの中学生の夏休みを紹介し、最後に「Please tell me about your summer vacation.」とお願いを伝え、生徒の取組への意欲を高めた。帯活動では過去形動詞のチャンツをリズムボックスを使いながら、生徒に徐々に負荷をかけながらリピートをしたり、ペアで言い合ったりすることで、定着を図った。その際も、単元の目標を達成するために必要な知識だということを意識させた。また、Small Talkを帯活動で数回言い、ペアを変えたり、中

間指導を入れたりすることで、自分のスピーチを練り上げていくことに取り組んだ。

#### ④ 小中連携の取組

益城町内の小学校・中学校の英語科担当全員で公開授業を行っている。また、校内の英語科教員がその公開授業に合わせて、互いに授業を参観し、意見を交換し合う中で、授業改善を図り、より良い授業づくりに向けて努めることができた。

### III 研究のまとめ

#### 1 研究の成果

本年度の県学調の結果を見ると、1年生、2年生において、「日ごろの指導の成果が表れている」結果となった。授業づくり部の取組である「サンタの授業実践上のポイント」の推進を中心とした授業改善や、様々な取組の成果が表れていると考えられる。

資料23は、「上益城の人づくり」プロジェクト～R6～の重点項目の昨年度の結果と、それを受けて本校年度当初に設定した目標値、そして現在の結果である。結果は上益城教育事務所に報告した県学調質問紙の数値であるため、1・2年生のみの数値を示す。

質問項目	R5年度 結果	R6年度 目標	R6年度 結果	R5年度 比較
1 将来、あんな人になりたい。こんな仕事に就きたい、こんなことがしたいという、夢や目標がありますか？ （「はっきりとある」＋「一応ある」の割合）	72.0%	75.0%	71.4%	-0.6
2 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいると思いますか （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	58.6%	65.0%	68.5%	+9.9
3 学級や友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	58.8%	65.0%	75.7%	+16.9
4 家で勉強するときは、自分で計画を立てていますか？ （「いつも立てている」＋「だいたい立てている」の割合）	43.7%	50.0%	84.0%	+40.3
5 1カ月に何冊くらい本を読みますか？（漫画や雑誌は除く） （「全く読まない」＋「1冊くらい」の割合で <b>少ないほどよい</b> ）	62.7%	55.0%	32.9%	-29.8
6 つらいことや、困ったことを、学校の先生に相談できますか？ （「相談できる」＋「たぶん相談できる」の割合）	52.0%	55.0%	57.2%	+5.2

資料23 「上益城の人づくり」プロジェクト～R6～の重点項目の結果及び目標値

ほとんどの項目において、年度当初に設定した数値目標を大きく上回る結果が得られた。特に昨年度まで長く本校の課題となっていた家庭学習の計画については、生徒個々に委ねるのではなく、環境づくり部を中心として学校総体で計画を立てる場を設定したり、計画を立てるアドバイスの場を設定したりしてきたことが大きな成果につながった。今後も継続していきながら、その内容の充実を目指せば更なる学力向上が期

待できると手応えを感じている。また、読書時間・読書習慣に関しても、本校の大きな課題であったが、朝読書で読書時間の確保ができたことが改善の大きな要因になっている。学校の課題を解決するために、学校で何が保証できるか、どのように保証できるかを考え、教育課程や学校生活の中に位置付けていくことは、確かな成果を生むと実感できた。

また、資料24は、本研究の3つの部会が、部会の取組の成果を確かめることができる指標として設定した県学調質問紙のいくつかの項目の数値変容の結果である。なお、資料23で示している「上益城の人づくり」プロジェクト～R6～の重点項目と重なる項目もあるが、ここでは3年生も含めた校内アンケートによる結果を示す。

授業づくり部の取組の成果指標（全学年）		7月	12月	変容
1	学校の授業では、友達と教え合う時間がありますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	94.9%	96.0%	+1.1
2	グループで話し合う授業は楽しいですか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	88.8%	89.7%	+0.9
3	学級や友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、 広げたりすることができていると思いますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	77.0%	81.3%	+4.3
4	授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる と思いますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	74.8%	73.4%	-1.4
環境づくり部の取組の成果指標（全学年）		7月	12月	変容
1	家で勉強するときは、自分で計画を立てていますか？ （「いつも立てている」＋「だいたい立てている」の割合）	59.9%	83.2%	+23.3
2	学校の授業以外に、平日（月～金）1日どれくらいの時間勉強しますか？ （塾などでの勉強時間も含まず） （「全くしない」＋「30分くらい」の割合） <b>少ないほどよい</b>	36.7%	28.9%	-7.8
3	あなたのクラスでは、みんなが掃除当番や係の仕事を、責任をもって していますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	76.9%	71.2%	-5.7
4	あなたは地球上でたった一人の、あなたのことを大切に思っている人々にとっ て、かけがえのない存在であるということを知っていますか？ （「はい」＋「どちらかといえばはい」の割合）	79.1%	82.4%	+3.3
英語教育部会の取組の成果指標（全学年）		7月	12月	変容
1	英語の勉強は好きですか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	44.2%	52.1%	+7.9
2	英語の勉強はよく分かりますか？ （「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」の割合）	57.0%	57.9%	+0.9

資料24 各部会の成果指標の結果

授業づくり部では、授業改善の中心をサンタの授業実践に置き、その実現に向けて様々な取組を進めてきた。特に本年度の大研では、グループでの学び合いについて議論に上ることが多く、その効果的なあり方をモデルとして示してきたこともあり、他者と協働する学びの場やその有用感についての成果が出ている。

また、自己肯定感、規範意識の項目に関しては、大きな課題となっていたため抜本的な改善が見られる結果は得られなかったが、自己肯定感に関する数値はやや増加が見られた。生活習慣の改善という抜本的な課題改善に取り組みながら、授業や学習の場面を中心に他者との関わりの中で自己有用感が生まれ、その結果として自己肯定感が増加したものとする。

資料25は、自己肯定感と規範意識の指標項目について、県学調の対象である1・2年生を県と比較した結果である。

質問項目	1年 県比較	2年 県比較	2年 1年時県比較	2年 県比較の上昇率
1 あなたのクラスでは、みんなが掃除当番や係の仕事を、責任をもってしていますか？（「当てはまる」＋「どちらかといえば当てはまる」）の割合	-3.8	-9.7	-19.6	+9.9
2 あなたは地球上でたった一人の、あなたのことを大切に思っている人々にとって、かけがえのない存在であるということを知っていますか？（「はい」＋「どちらかといえばはい」）の割合	+2.1	+2.7	-3.6	+6.3

資料25 規範意識と自己肯定感の成果指標の結果

自己肯定感について、昨年度県平均を大きく下回った2年生についても、今年度は県との差が縮まっている。自分を大切な存在だと認めることができる生徒が確かに増加しており、学校の課題改善の兆しが見える結果となった。

英語部会の取組により、学年が上がるにつれて英語の理解度が下がり、それに伴い「英語が好き」と答える生徒が減少する本校の課題を、情意面では克服することができたと考えられる。様々な授業改善とその工夫、小中連携による困り感の減少が要因であると考えられる。また、正答率は県平均を下回ったが、観点別に見たときに両学年とも「聞くこと」の正答率が高いのも、「音声から文字へ」にこだわった結果であろう。

ここで、これらの成果が職員の意識や授業改善によるものなのかを確認するため、本校で学期末に毎回行っている学校評価アンケートの中の職員への質問項目の結果（資料26）を参照したい。

職員を対象にした学校評価アンケートの結果		1学期	3学期	変容
1	「(楽しく・ためになり・試してみたくなる) サンタの授業実践上のポイント」を意識して授業をしていますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	83.2%	88.1%	+4.9
2	授業の中で、他者との対話や協働によって課題を解決したり、考えを深めたりする学びの場を設定していますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	83.4%	91.2%	+7.8
3	生徒が学びの主体となるような授業改善に努め、授業後は自らの授業を振り返り次時の指導に生かしていますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	80.6%	86.0%	+5.4
4	諸調査等の結果分析を生かして指導をしたり、個に応じた指導をしたりして基礎学力の定着に努めていますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	73.5%	86.9%	+13.4
5	学習規範の定着に向けて指導したり、考え方の違いを大切に失敗や間違いも互いに認め合える学習集団形成に努めたりしていますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	80.0%	81.4%	+1.4
6	家庭学習の習慣化に向けて指導したり、計画的に取り組むことができるように計画の立て方を指導したりしていますか？ (「当てはまる」+「どちらかといえば当てはまる」の割合)	53.7%	60.4%	+6.7

資料2 6 学校評価アンケートの職員質問の結果

学習指導に関する6つの項目すべてで、数値の上昇が確認できた。本研究推進の中で様々な取組をしながら、職員の意識や授業改善、学習指導が充実したことで、成果に結びついたと考えられる。

## 2 研究の課題と今後の志向

大きな成果が得られた一方で、依然として課題も残る。学力面では、英語の学力向上は県や全国と比較したとき、相対的に十分な学力が身に付いているとはいえない結果であった。「英語が好き」「英語が分かる」と回答している生徒は増加しており、前向きに授業に参加できていることや授業改善が進んでいることは確かであるため、今後も継続して数値変容にまで繋げることができるよう、さらに研究を進めたい。英語教育の専門性から迫る部分だけではなく、学校総体としての授業づくりからアプローチすることを大切にしたい。

また、規範意識については昨年度に比べると改善傾向にあるものの、依然として県や全国と比較しても満足できる状況であるとは言えない。次年度以降も引き続き、学習規範の指導など、学習指導からも迫ることができる規範意識の醸成を目指したい。

## おわりに

本研究を進めるにあたり、生徒たちの確かな学力を保障するために、実態を分析し、部会ごとにと組を発信しながら共通実践事項を中心に組を進めてきました。大きな変容を得ることができたことも多く、「やればできる」を実感でき、来年度以降の学びにもつながる見通しを持てる組だったと振り返っています。

本研究の成果を、私たち職員はもちろん生徒や保護者と共有しながら自信につなげるとともに、課題を真摯に受け止め、確かな学力を保障する実践を続けて参ります。目の前の子どもたちの「今」の姿を大切に、そして同時に「未来」を豊かに生きる姿を思い描きながら、「みんなで」学力向上に努めていきたいと考えております。

今後とも、本校の研究推進に対して、ご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 《参考文献》

文科省「我が国の子どもたちの学力と学習の状況」

国立教育政策研究所生徒指導研究センター「これだけは押さえよう～生徒指導はじめの一步～」

『国立教育政策研究所紀要』第 140 集「小学校からの生徒指導～『生徒指導提要』を読み進めるために～」(2011年3月発行)

熊本県教育委員会『熊本の学び推進プラン』(2019年12月発行)

熊本県立教育センター『学びのUD化取組の視点(例)』(2014年発行)

熊本県教育委員会『ICT活用実践事例集 小・中学校編』(2020年発行)

益城町教育委員会『夢実現！小中連携を踏まえた教育イノベーションへの挑戦～限りない教師の挑戦ETC～』(2022年4月発行)